

「2022年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学工学部2年 井上創太

今回のベトナム国家大学スプリングスクール派遣プログラムは自身最長の海外滞在でした。参加前から海外大学院進学に対して強く興味を持っていて、その第一歩として、2週間のベトナム国家大学での本プログラムに応募しました。ノイバイ国際空港に着いたときに、まず空港の周囲の「空気感」の違いを感じました。交通はもちろんのこと、天候、人の距離感など違いを感じ、高揚と同時に緊張を感じました。旅行で海外を訪れた時と異なり、ここで多くのことを経験し、吸収してやるといった使命感を持ちながら、慣れないGrabタクシーに乗り込んだことが印象的です。

今回のプログラムを通して、ベトナムの学生と積極的に交流し、多くの時間を共に過ごしました。その中で自身のキャリアについての考えに変化がありました。ベトナムの学生の多くが、日本語能力長けており、日本留学の予定、計画がある人が多数いらっしゃいました。彼らの多くは、自主的に日本語を学び、日本語能力を身に付けてその後の自らのキャリアに活かしたいという目的意識を強く持って学習しているように感じました。彼らの中には、来年から日本の予備学校に1年通い、その後4年制の日本の大学で、建築や経済を学ぶ予定だという方もいました。その時、自らのキャリア選択の視野の狭さを感じ、同時に日々、目的意識をもって学ぶということの重大さを再認識しました。自身は4年生の研究室配属での配属を目標としている研究室があり、比較的、目的意識をもって学習している意識がありました。同時に海外大学院への進学を考えていることもあり、語学への関心や意欲も強く、そのために行動している方だと思っていました。しかし、この程度の目的意識や行動は、彼らと比べるとなんら特別なことではなく、至極当たり前のことだと感じ、強い焦りとモチベーションの向上を感じました。国外の積極的に学ぶ学生たちと交流することで、自身の学びやキャリアへの考えをより相対化して考えることが出来たと思いました。

またプログラムの目玉ともいえる共同発表でも自身の考えをより相対化することが出来ました。我々のグループは「平和と戦争教育」というテーマを扱い、両国の学生の「平和と戦争に対する意識」に迫る調査を行いました。アンケート形式で、日本の学生とベトナムの学生に調査を行ったのですが、日本-ベトナム間の違いだけでなく、自身の考えと、日本の学生の調査結果の違いにも気づき、とても興味深かったです。今回のアンケート項目の中の「自国で戦争が起きたら、あなたはどのように考えるのだろうか」という項目は、私自身が昨今のニュースを見る中で感じ、そして同年代の人はどのように考えるのだろうかと思ったことからきており、日本の学生の回答も、ベトナムの学生の回答もとても興味深かったです。アンケート項目を考えるなかで、日本人メンバーと、ベトナム人メンバーとで議論し、その後の結果への考察での議論でも、ベトナム人学生の、自身とは大きく異なる背景から出てくる意見や考察に驚きつつ、とても学びある議論が出来たと思いました。日本人同士でも、ほぼ同様の歴史教育、平和教育を受けているのにも関わらず、意見や表現、認識の差があり、その点の議論も、ある種、自身の考えの相対化に大きく影響を与えたと思いました。

2週間という短期ではあるものの、ベトナムでの生活に順応していくことが私自身の最も大きな不安点であったのですが、それは思ったより問題なく乗り越えることが出来ました。もちろんホテルで生活したということもあるのだと思いますが、食事や気候、習慣に慣れることはあまり大きな問題ではありませんでした。元々、食材や味に関して、食べられないものがないということもあってか、食事は、飲み水に気を付けるということ以外は普段通りであったと思います。独特の香草にもすぐ慣れ、後半には少し恋しくなるほどでした。天候はベトナムもちょうど季節の変わり目ということもあって、1周目と2週目の気温の違いがとても大きかったです。上の服の半分は半袖をもっていってもよかったなと後悔しました。また日用的に使うものは思ったより多めに持って行

った方が、困ることがなくてよいと思います。私はコンタクトレンズの殺菌洗浄液が2週目の途中で尽きてしまいました。コンタクトレンズは日本と比べて、普及しておらず、簡単に見つけられず、結局諦めました。交通の混雑や、交通ルールを守らないことで、歩行者信号が機能しておらず、道を渡ることが困難であること、クラクションの多用、行商の方やタクシー運転手の客引きなど日本ではない習慣に驚くこともありましたが、ものの数日で順応しました。自分自身で新しい環境になじむのは得意な方とっていたのですが、振り返ってみるとうまく順応出来てよかったと安堵しています。しかし、メンバーの中には、体調不良になってしまった方もいらっしゃり、今回の私は運がよかったですとも思っています。親元を離れた海外で体調不良になるということはより一層不安なことだと思うので、その時、その他のメンバー、ベトナムの学生で協力して、その方をサポートできたのはよかったと思いました。そのため11人ものメンバーで向かっている意味だとも思い、体調不良、貴重品の紛失など何かトラブルが起きたときになってしまったときに、助けを求められるように日本人メンバー間での良い関係づくり、そしてベトナムの学生との良い関係づくりが必要不可欠だったなと思いました。

すこし心残りだったのが、ベトナム語を使う機会を多く作ることが出来なかったことです。ベトナムの学生は日本語が堪能ですし、足りないところは英語でカバーできてしまい、我々のベトナム語を使う機会を作るのは少し難しかったです。もちろん、彼らに積極的にベトナム語ではどのように言うかなどと質問し、会話の中でベトナム語を学ぶように努力したものの、なかなか体得することは難しかったです。ULISの方で主にベトナム語を教えていただきましたが、プログラムの後半であったため、習ったことを活かすきれずにプログラムの終了を迎えてしまった感が否めませんでした。しかし、ベトナムの学生の多くと共に多くの時間を過ごし、帰国後もSNSを通して交流が出来るこの環境を生かし、少しでもベトナム語学習をしていきたいなと思っています。

今回のプログラムを経験し、自分自身のComfort Zoneが大きく広がったと感じています。2週間という期間、日本とは天候、食事、言語、習慣と大きく異なる部分の多いベトナムで生活し、不自由に思うことも全くなかったわけではありません。しかし、その中で日本の学生、ベトナムの学生の助けを借りながらではありますが、順応し、積極的に交流し、とても充実した日々を過ごすことが出来ました。短い時間ではあったものの、この経験で得た学びによって、海外大学院進学の意味が強まり、より国際的なキャリア選択のために、これからの大学生活で、専門、語学含め、より強い目的意識と高いモチベーションをもって、学習していくことを誓い、報告書のまとめとさせていただきます。

このような貴重な経験をさせてくださったベトナム国家大学 USSH、ULIS、京都大学のプログラム担当者の方々に、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。